

トドの胃内容物について

釧路水産試験場 資源管理部

●研究の目的

近年、トドにより網にかかった魚を食いちぎられたり、網を破られたりするなどの漁業被害が、北海道や青森県で大きな問題となっており、その対策として、強化網の開発などが行われている。しかし、漁業被害発生メカニズムや、漁業対象種の捕食量などについての詳細は明らかになっていない。本研究は、水産庁からの受託事業として、トドの胃内容物を調べ、その食性を明らかにすることにより、漁業被害の実態解明に役立てることを目的とする。

●研究の方法

平成17年1月～平成18年5月に、北海道各沿岸域において採捕されたトド57個体の胃内容物分析を行った(表1)。

胃内容物は、各餌生物の種または科を同定した後、各々の湿重量を計測し、出現頻度(F%:その餌を捕食していた胃数÷空胃を除く全標本胃数×100%)および重量割合(W%:餌生物重量÷全餌生物重量×100%)を求めた。

●研究の成果

<積丹> 両年ともホッケおよびタコ類(主にミズダコ)が、F%およびW%ともに高く、主要餌生物となっていた。その他にイカナゴ属魚類やマダラなどが、主に摂餌されていた。

<利尻島> イカナゴ属魚類(主にイカナゴ)が主要餌生物となっており、F%は両年とも100%であった。その他にタコ類のF%も高かった。

<礼文島> 礼文海域では、2005年の2個体の標本しか得られず、詳細な傾向は不明である。マダラおよびタコ類が、主要な餌生物となっていると考えられた。

<雄冬岬> 両年ともにカレイ科魚類のF%が高かった。また、2006年は、カタクチイワシの重量割合が高かった。当海域については、標本数が少なく、詳細な傾向は把握できていない。

<羅臼> 2005年に得られた標本ではボラ、2006年ではスケトウダラが、F%、W%ともに高く、主要な餌生物となっていた。その他に、ドスイカ、マダラ、カレイ類などが主要餌生物となっていた。

これらの結果から、トドの餌生物組成は海域ごとに大きく異なっていることが明らかになった。また、同じ海域であっても、年によって主に食べている種類や量に違いが見られた。このことは、トドが各索餌海域において摂餌しやすい餌生物を、日和見的に捕食するという性質を反映していると考えられた。

トドにとって摂餌しやすい餌生物とは、量が多いこと、集群性が強いこと、移動速度が遅いことなどであると思われる。

●成果の活用

現在も調査は継続しており、トドの食性に関する知見をさらに収集中である。胃内容物データの蓄積によって、北海道に来遊するトドの食物消費量算出が可能になるほか、漁業被害の実態把握や、漁業との競合関係について、詳細な解析が可能となる。

表 1 本調査に用いた標本数

海域	積丹 (神恵内～小樽)		利尻島		礼文島	雄冬岬 (小平～浜益)		羅臼	
	年	2005	2006	2005	2006	2005	2005	2006	2005
標本数	9	13	6	6	2	2	3	7	8
空胃数	0	0	0	0	0	0	1	1	0
分析数	9	13	6	6	2	2	2	6	8

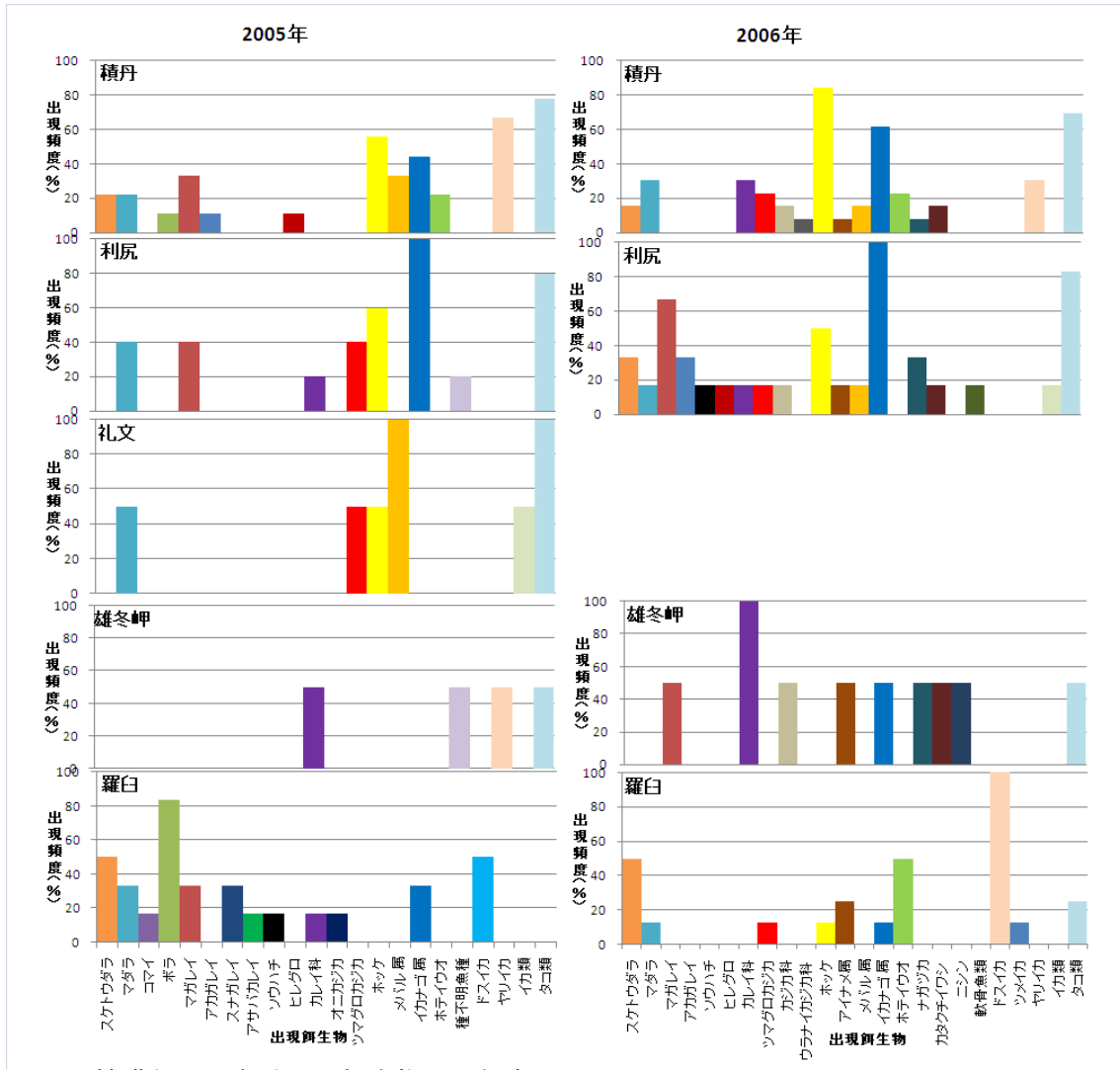


図 1 捕獲年別・海域別の餌生物出現頻度

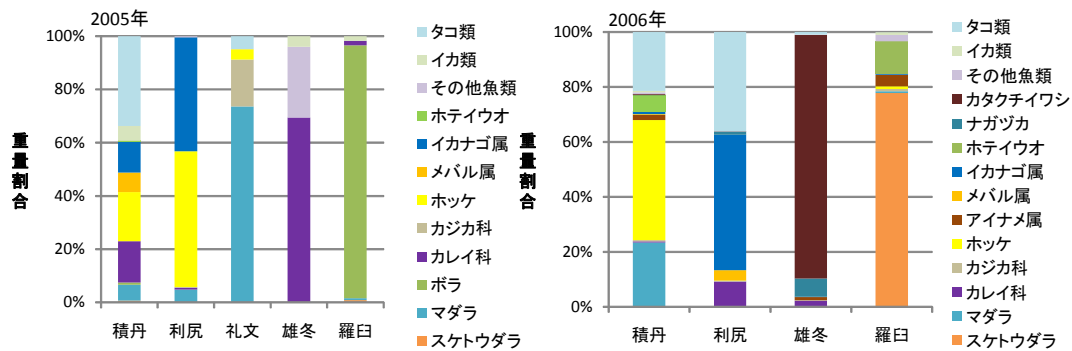


図 2 捕獲年別・海域別の餌生物重量割合